

第8回 全国版 子どもの集い・交流会 実施報告

親&子どものサポートを考える会

11月7日(土)に実施しました『第8回 全国版 精神障がいの親と暮らす子どもの集い・交流会』が終了しましたので、ご報告させていただきます。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を懸念し、オンライン(Zoom)開催とさせていただきます。形式も従来の参加者は子どもの方に限定、午前を全体会、午後は小グループでの語りの場という形式から変更し、全体会を中心とした開催に変更させていただきました。

1. 当日の参加状況

グループでの意見交流には不参加という方もおられましたが、子どもの参加者15名、支援者の参加者30名、演者を含むスタッフ10名の参加で、合計55名でした。

終了後のアンケートには23名の方から回答をいただきました(アンケート回収率51.1%)。23名の内訳は、子どもの立場の方が9名、支援者の方が14名でした。参加者の居住地は、北海道・東北1名、関東11名、中部6名、近畿3名、中国・四国1名、九州・沖縄1名でした。

2. 当日の流れと全体共有での意見

当日はオリエンテーションの後、テーマとして掲げた「学校教育における子ども支援」について、東京都立大学・長沼葉月先生、埼玉県立大学・上原美子先生、桑名市明成中学・谷岡慎悟先生、ぷるすあるは・北野陽子先生、細尾ちあきさんよりご講演いただき、その後、小グループに分かれて意見交換、全体共有をしました。それぞれのグループから共有された主な意見は、以下でした。

《支援者・教育機関のグループ》

- ・子どもが安心して学校生活を送れるようにすることが必要。
- ・子どもがSOSを出せるための支援が必要。そのためにも教員が変化に気づく取り組みがいる。教員の気づく力を育てる。
- ・相談先など繋がる場所を知らないと繋がれない。
- ・教員の意識改革が必要。気楽に横と繋がれるように。
- ・PSW、SCなどは日々子どもと関わりを持ってないが、日々関わる人と別な視点で関わる者の味方を織り交ぜて子どもを支える。
- ・子どもには、「大切にされていること」が伝わるようにしていく。
- ・問題解決するだけでなく、何とかしようと奮闘する大人の姿から子どもが「こういう大人もいる」という認識をもてるようにしていく。
- ・保護者の同意を取ることや家庭との連携はハードルが高い。
- ・親の理解という点では、直接会う大事さもある。
- ・成功例の共有をしていく、その場しのぎの大切さ。

《支援者・医療/福祉機関のグループ》

- ・学校に関しては、教員に余裕がない、SC や SSW の機能がうまく回っていない、地域差もあり制度的に整っていない等の問題がある。
- ・家族が面倒を見るのが当たり前という日本の考え方、他国との違いがある。
- ・病気や障害の理解、受容を含め多様性の理解が必要である。
- ・親の支援・サポートが子どものサポートに繋がる。
- ・居場所のあり方として学校内に居場所カフェを設置している県もある。
- ・学校だけでなく、いろいろな場を取り組んでいくことが必要。インフォーマルなつながりも必要ではないか。
- ・いろいろな立場を知ることが必要、患者と繋がっても家族にはつながれないなど枠組みがない。気づいた人が気づいた場所から始める。アプローチしていくことの大切さ。

《子どもグループ》

- ・子どもは学校と家の往復であり視野も行動範囲も狭い。そう考えると学校は救いになる。でも「親がこうでね…」とはなかなか言えない。理解してくれる大人の存在が必要。諦める形で気持ちの整理をしてきた。
- ・大人になっても子どもの頃感じたこと・体験を引きずる。
- ・子どもによってニーズは違うが、話を聞いて欲しい。それぞれの思いをわかってほしい。
- ・共通の願いは、今の子どもに同じような苦しい思いをして欲しくないこと。
- ・具体的な相談にはならなくても、家のことを話すことがある。その時に流されてしまったり、受け止めてもらえないと言えなくなってしまう。大人になっても節目節目に思い出し、落ち着かない。受け止めてもらえることが大事。まず、思いを聞いて欲しい。
- ・児童相談所に繋がっても、今思うと支援されても役に立っていた感覚がない。支援とニーズが一致していなかった。子どもはこの人は頼れる人か？を見ている。話しても大丈夫なのか、話せる場を作ることが大事。
- ・相談先や連絡先のリストを学校に掲示しておく子どもが必要な時に情報を入手できる。
- ・未受診の親の場合、支援の対象から漏れてしまう。また、未成年の子どもは親の承諾がないとできないということも多く、様々な点でサービスを受けられなくなってしまう。
- ・子どもには、「先生はすごい人」「勉強を教える人」という認識があるため、先生には言えない。怒られないようにしてきた。
- ・精神疾患について知る機会がなかった。学校で精神疾患について教えて欲しい。
- ・孤独だった。いろんな家庭がある。アルコール、がんなど多様性のひとつに精神疾患の親がいる家庭も入れてくれたら…。他の人もいるとわかれば…。居場所がなかった。

3. アンケート結果

1) 参加動機

《子どもの立場》

- ・教育現場での取り組みについて知りたかった
- ・子どもへの支援がスムーズにいくことへの期待

- ・同じ立場の人と交流したかった
- ・いろいろな意見を聞いて気持ちを整理したかった などでした。

《支援者の立場》

- ・子どもの思いを知りたかった
- ・自分に何ができるのかヒントを得たかった
- ・どのような課題があるのかそれぞれの立場の声を聞きたかった
- ・「精神疾患を抱える親・家庭に関わる難しさ、もどかしさを感じていたため」などでした。

2) 満足度

《子ども》 9名

40%・1名、70%・4名、80%・1名、90%・2名、100%・1名

《支援者》 14名

70%・1名、80%・6名、90%・5名、100%・2名

それぞれ、以下の理由が挙げられた。

《40%の意見》

- ・前半の講演でテーマとの関連性が見えづらいところがあった。後半のグループワークは、機器トラブルで進行がストップしてしまうことがあり、話し合いが深まらなかった。グループワークの時間はもう少し長くする必要がある（子ども）。

《70%の意見》

- ・Web開催の限界があり、昨年の方が満足度が高かったため（子ども）。
- ・いつもならパワーポイントを使った話や資料を見ながら話が聴けるが、オンラインだったため（子ども）。
- ・今度はやはり直接皆さんと話がしたいです。一人一人の体験や気持ちを語るのは難しいと思いました（子ども）。
- ・意見交換の時間がもっとあると、話が深くまでできて良かった（子ども）。
- ・グループワークで自分が課題と思っていたについて、取り組み状況を聞き、具体的なアイデアが得られたため（支援者）。

《80%の意見》

- ・参加できたことが良かった（子ども）。
- ・ブレイクアウトでも、他の「子の立場」の人の意見や経験がきけたことは貴重な経験だった（子ども）。
- ・発表者の意見やわかちあいが学びになった（支援者）。
- ・教育や支援職の様々な方と話ができて、教育と保健医療福祉の連携の必要性を再確認した（支援者）。
- ・支援者の意見を子どもたちがどのように受け止めたのかとらえきれず、少し気がかりが残った。そういう葛藤や迷いを抱えながら支援のありようを模索していくことが大切だと改めて感じた（支援者）。
- ・グループの会話が進まなかったなので、もう少しファシリテーターが補助してくれるとありがたい。空気感ができるまでは主催側がファシリテートしてほしい（支援者）。

《90%の意見》

- ・ いろんな立場の人と話ができて良かった（子ども）。
- ・ 様々な立場の方が同じように子どもを支えていきたいと考えていることを知り、励みになった（支援者）。
- ・ 支援者が何ができるのか、皆さんどのような思いがあるのか聞けたから（支援者）。
- ・ 支援者だけでなく子どもの立場の方の話も聞きたかった。もっと時間があつたらよかった（支援者）。

《100%の意見》

- ・ 支援者の考えも子どもの考えも、全体で共有して勉強に繋がったから（子ども）。
- ・ 当事者、元当事者（ちあきさんの話など）を聞くことができて良かった（支援者）
- ・ グループワークで多くの気づきがあった（支援者）。
- ・ 教育関係者の話を聞く機会があまりなく、様々な立場の方と情報共有できたため（支援者）。

3) その他の感想

- ・ コロナ渦においてオンラインは仕方がないと思う。デメリットばかりではなく、遠方からでもコストを抑えて参加できるメリットがあったと思う。
- ・ オンラインだったが、声もよく聞こえ、表情も伝わり、話しやすかった。
- ・ 支援者のブレイクアートルームでは、支援者も繋がり支えられることの大切さを感じた。
- ・ 支援者の方や子どもの立場の方の両方の考えを聞くことができて勉強になった。

4. 全体を通しての総括

新型コロナウイルス感染症の拡大状況から、全国からお集まりいただく本会を従来通りの形で開催することは難しいと判断し、オンラインで全体会を中心とした形に変更し実施いたしました。子どもの方の殆どが経験し、何らかの思いを持っているのでは？と考え、全体会のテーマを『学校教育における子ども支援』とさせていただきましたが、今も親御さんとの生活に悩み、生きづらさを抱える子どもの方にとって、“今の思い”を語る場でなかったこともあり、継続して参加されていた方が参加を見合わせるなど、いつもと少し違った顔ぶれの開催になりました。学校教育をテーマにあげ、話題提供としてお話しいただく先生方の講演から子どもの状況や学校等での取り組み状況を知っていただく機会になるのでは？と考え、これまで子どもに限定していた参加条件を支援者にも広げた結果、子どもの参加者の倍に当たる支援者の方にご参加いただきました。ここからも、こうした子どもへの支援を考えたいと感じておられる方々が増えてきていることがうかがえます。

今回の企画では、様々な立場で子ども支援に携わっている先生方から親子支援に対する思いや現状をお話しいただき、その後、子ども・支援者のグループに分かれて意見交換、それを再び全体で共有するという流れを取らせていただきました。支援者の方の中には、直接子どもの思い（語り）を聞きたかったという方もおられるようですが、子どもの率直な意見を聞かせていただいたこと、また子どもの方にとっても、支援者が親子の現状をどんな風に捉え支援しようと考えているのかが伝わり、互いの思いを理解し合えたことは大きな意味

があったのではないかと考えております。それぞれのグループからの発表を聞いていると、どのグループからも語られたキーワードは『繋がり』だったのではないかと思います。子どもの思いをわかろう、知ろうとする姿勢を持って子どもと繋がる、支援者も職種や機関の垣根を越えて繋がる（教育・医療・福祉の連携）、できない部分・苦手な部分は他者の力を借りることが必要なのかと思います。また、親子が支援に繋がりやすくなるように、情報提供・発信していくことの重要性も確認できたように思います。そんな風にグループで意見交換したものを皆で共有できましたが、子どもの方の感想の中には、「同じ立場の仲間と会って、思いを語り合いたい」という思いが根強くあるようなので、この新型コロナウイルス感染症が落ち着いたら、従来通り、子どもに限定した集い・語りの場の提供を開催していきたいと考えています。

話題提供いただきました先生方、後援をいただきました関係機関の皆さま、本事業開催について多大なご協力をいただき、ありがとうございました。

2020年11月27日
親&子どものサポートを考える会
世話人代表 土田 幸子